

和光会会報No. 44

ー菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会ー

◆ 朱鞠内湖の水鏡 …… (2015-11) —山本拓弘（馬骨）さんから投稿頂きました—

今年（2014年夏）の北海道の旅で最も印象に残った場所といえば、それは朱鞠内（しゅまりない）湖の一日である。朱鞠内湖は雨竜郡幌加内町の北部にあり、凡その見当としては、旭川の北部に位置する士別市・名寄市の西部辺りに位置しているというところか。もう15年以上も北海道を訪ねているのに、今年初めて行った場所なのである。その感動を思い出しながら振り返ってみたい。

日本国は山国である。その背骨にあたる数々の山脈が列島を形成しているのだが、その山麓からは無数と言っていいほどの川が流れ出ている。どの川も最終的には海に流れ込むということになるけど、海に行く前により大きな川と合流してそこに流れを預けるという川も多い。北海道には石狩川という全国でも五本の指に数えられる大きな川があるが、朱鞠内湖を造り出したのは雨竜川や朱鞠内川他の幾つかの川たちである。その朱鞠内湖から流れ出る雨竜川は、なお幾つかの川を合わせながら流れ下って、やがて石狩川に合流する。

日本国には数多くのダムがある。川をせき止めて水をため、洪水に備えたり、飲料水として利用したり、或いは水力発電を行って電力の確保をしたりと、ダムは多目的な利用を図って、今もなお建設が検討されている様である。今の時代となって、その必要性がどれほどのものなのかは、凡人には想像もつかない話であるけど、旅をしていて、あまりにもダムの多いのに気づくと、何故それほどまでにという疑問を拭いえなくなる。この頃はその必要性について論じられることが多くなったが、それは飽和状態に近づいたことを示す証なのかもしれない。

朱鞠内湖を造り出した雨竜第一・第二ダムは、昭和2年（1927年）に着工され16年の歳月を要して昭和18年（1943年）に完成したという。当時の国情を考えると、このダムの建設には様々な事件というのか、今の時代では想像もつかないような出来事の中に含まれていたに違いない。ダム建設のいきさつや状況などを調べてみると、少し複雑な思いにとらわれる。ま、そのことは措くとして。朱鞠内というのはどういう意味なのかを地名辞典で調べてみた。二説あって、一つはこのエリアの川には石ころが多いことから、アイヌ語でシュマ・リ・ナイ（＝石・高い・川）から来たのではないかというのと、もう一つはこの辺りには狐がたくさん住んでいたことから、シュマリ・ナイ（＝狐・川）という説である。湖畔の説明板には後者の方を取り上げた内容が書かれていた。それで、自分的にはナイ＝沢と解釈して、朱鞠内＝狐沢と呼ぶことにした。というのも、近くでキャンプしていた人の話では、夜中に狐がやって来て、それをカメラに収めたとのこと。それを見せて貰って、今でもこの辺りにはキタキツネの子孫がかなり住んでいるのだなと思ったからである。

ほんの少し知ったかぶりをしたけど、これらは朱鞠内湖に関する基本情報のようなものである。感動したのは、そのようなことではない。湖の景観と雰囲気は心を奪われたのだった。今まで相当数の湖といわれる場所を訪ねているが、この朱鞠内湖ほど深沈とした水を湛えている所はなかった。ここへきてキャンプ場の管理事務所の受付に行くと、一晩泊るだけで一人600円という料金を聞いて、どうするかをためらった。二人で1200円、水とトイレはOKだが、電源は別料金だし、ゴミは持ち帰りだという。北海道のキャンプ場の中では、あまりにも高額な料金なので、ためらわざるを得なかったのだ。それでも泊る気になったのは、下見に行ってみると眺めた湖面の景観が、大空を映して何とも言えない巨大な鏡のように見えたのである。これは金には代えられない景色だ。そう思ったからだった。

今日は快晴で、風もなく湖面は鏡のように静まっていた。泊りの車も少ないようで、湖畔近くの小さな高台に車を置くことが出来た。ここからは湖畔にある何本かの樹木の向こうに、鏡の水面に映る真っ白な雲を見ることが出来る。樹が少し邪魔だったけど、大空に浮かぶ雲がこれほどくっきりと鏡に映るのを見るのは初めてのことのようには思えた。さざ波すら無く、まさに天然の水鏡なのである。しばらく

その大きな景観に見入った。料金のことなど忘れてしまっていた。

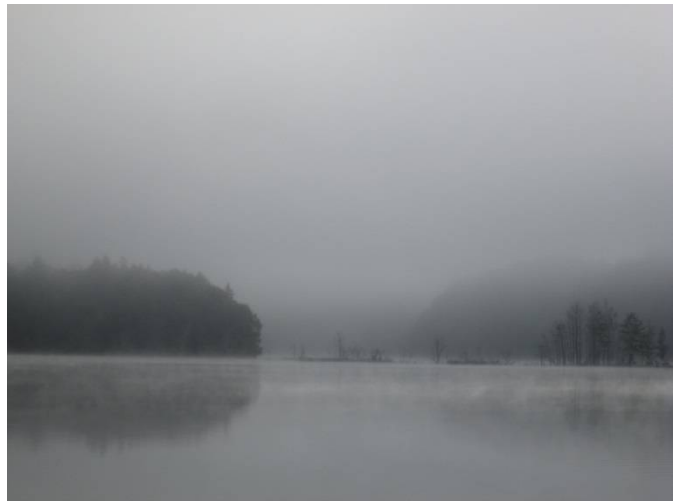


巨大な鏡に映った空と雲と樹木たちの躍動。北の大地を存分に味わうことが出来る、光の溢れた時間だった

翌日はいつものように早朝の5時には起き出したのだが、辺りは一面の霧で、湖面すらも見えないほどだった。1時間ほど待っていると、次第に霧は薄くなり出し、間もなく湖水に僅かに逆さの景色を写した岸边の様子が墨絵ボカシのように現れて来た。まさに水墨画の世界だなと思った。昨日は洋画の世界だったのだが、今眼前にあるのは、黒白の色の世界なのである。これもまた一瞬息をのむような感動の世界だった。大自然のこの変化は、どこから生まれ出てくるのだろうか。元の天然色の世界に戻るまでの僅かの時間だったけど、この景観を見ることが出来たのは幸運という以外にない。

間もなく日が昇って、晴天に白雲を浮かべる景色に戻ったのだが、これら一連の光と影の戯れの中に垣間見たのは、湖の不動の存在だった。

「明鏡止水」ということばがある。邪念がなく静かに澄んだ心境のことを言うと広辞苑にあるけど、この湖と自分の心が一体となれたなら、このことばの意味が本当に理解できるのかもしれない。未だ邪念に溢れ、ささやかな出来事にさえも揺れ動いてばかりいる自分の心の拙さを思い知らされた気がした。この先、心に波立つ時には、せめて一時もこの景観を思い出し、深呼吸をしなければと思った。深い感動を心の奥にしっかり仕舞っておこうと思った。



朝の朱鞠内湖のひとは、まさに水墨画の世界だった。北の大地の厳かな始まりを感じた

(2014年 北海道の旅から)

◆ ひまる会(昭和40年入社同期会) IN 軽井沢

…… (2015-10) —和 原田 憲一さんから投稿頂きました—

今年、しまる会は入社50周年を迎え、軽井沢で相変わらずの悟りとは無縁の未熟を愉しむ会を開くことができた。これまで30周年は「奥さんも同行のマレーシア」、40周年は「京都・嵐山」、と時宜をとらえ旅を重ねてきたが、実のところは、東京・名古屋・大阪・(一度福岡)が持ち回り幹事で、毎年旅先でゴルフと観光を楽しんでいる。

昭和40年入社の世代は、団塊の世代の一手前、ともすれば、一つの価値観に向かって「よーい、どん」でひたすら走ってきた輩である。

教育センターが正式に発足した第一期生で、設備・教材も限られたなか、木造二階建て12畳に6人のたこ部屋で、ここを拠点に現場実習、稲電実習(和電・長電実習)と1年間同じ飯を食った仲間であり、同じ方向を向いて走り続けてきた仲間である。だから今、価値観の多様化と言われても、戸惑いを覚えて当然である。

そんな仲間だからこそ、一年に一回糸を紡いで、よりをかけ長い糸を織りなしているのではないだろうか。9月30日コスモスが揺れる晩秋の軽井沢駅。東京、名古屋、大阪、北陸、九州から懐かしい顔ぶれが勢ぞろい。直行組を含め総勢32名がステラ軽井沢に集合。

ステラ軽井沢 「こころ」は青春だけれども「からだ」は悲鳴を上げている爺さんたち



開会挨拶

「しまる会」寺門幹事の提案でまずは記念写真。

「爺さんたちは酔っぱらうと言うこと聞かねえ〜から、先に写真とつとこー。みんな顔が崩れてきてるから、せめて笑顔くらい創つとけや」

さあ、待ちきれんばかりと長島会長の挨拶で宴会の始まり。

「今年もこうして再会できたことは大変喜ばしい。大いに遊び、ますます男の行間を広め輝いていこう」

そして、坂倉大阪支部長の乾杯。

「来年は伊勢志摩サミットや、しまる会サミットはそれを超えてみせるぞー」間髪を入れず、土屋幹事長から50周年記念

品の説明。「50周年の記念品は浅草・浅草寺の千社札で、（しまる会50周年）が記載された個人の名前入り、しかも健康とポケ封じを祈願されたものですから、ありがたくお受け取り下さい」

さすが、土屋幹事長これだけではおわりません。

「奥さんのおみやげとして、美智子妃殿下が愛される“あんずの花”、よく訪れられる千曲市のあんずの里で採れた“あんずジャム”を持ち帰りください」

幹事長のこの配慮が「しまる会」のつなぎになっているの言うまではありません。

さらに、長野支店長からの長野の銘酒「真澄」の差し入れの紹介があり、宴席は一気に佳境に・・・。

高卒入社も来年は古希、学卒入社は後期高齢者となる。若い子からみたら明らかに爺さんなんです、本人はまだまだ若いイメージを引きずっている。要は、体の老いに気持ちが追いついていかないわけである。

「最近なんだか、どこかヘンなんだよな。オレ」

「それは、まず下からやってくるだろう」

「やたら、おしっこが近いんだよ」

「イヤー、オレは切れがわるくてね」

よく歳をとると、「歯・目・まら」と言われるが、それに近い順番で体の衰えを感じるようだ。

歯槽膿漏になり、老眼へと突入する。

古希、後期高齢者とは、チョット切ない響きをもつ言葉だが、また別の観点からみれば、今まで自分が体験してきたいろいろな出来事から学び、若いころには決してわからなかった人生そのものの醍醐味を、甘受できる年代になったと言えるのではないかと思う。

だれだって自分の老化なんて認めたくない。「年だから」なんていう言葉は使いたくない。いつだって「こころ」は青春でいたい。でも「からだ」はかなり正直者。

だから時には耳をそばだてて「からだ」からの悲鳴を聞いてあげないといけない。

そして、「楽しい時」を満喫すればいい。

その中でまた、新たな自分との出会いが「大人の喜び」を導いてくれるだろう。

宴席の会話は「からだ」のことばかりだが、お互いを気遣い、思いやる気持ちに溢れていた。

宴も時間超過、来年の再会を約束し、またバカ話できることを願い一本締め・・・。二次会へと流れていった。



乾杯発生



懇親風景



一本締め

中軽井沢カントリークラブ ～ 軽井沢の薫りに魅せられて

ゴルフ組はステラ軽井沢を 6:30 出発。車で約 30 分、旧軽井沢銀座通りはすぐ近くにある中軽井沢カントリークラブへ。雄大な浅間山を前に広がる適度にアップダウンのある林間コース。結構難易度の高いホールが目立ち、確実なショットが求められ、チョット外れれば池ポチャ、バンカーにはまり泥沼へ・・・昨日の天気予報では、低気圧の影響で曇り時々雨・風強しとのことであったが、さすが「しまる会」は強運の持ち主、予報を吹っ飛ばし見事に快晴でゴルフ日和。

「これじゃあ、言い訳できんけん酒飲まなあかで!!」

「そや、どうせ優勝は名古屋の K さんか O さんや」

「いいじゃんか、オレたちは健康のためのゴルフやんけ」

クラブハウスに着くや否や、レストランで朝食。それぞれテーブルに着き、朝食なのか酒席なのかかわからない雰囲気、声も次第に大きくなる者、コーヒーを飲みながらじっとコースを眺める者とそれぞれである。

「浅間山見事やけど、大丈夫かい」

「ここんとこ、あちこちで火山が噴火しとるけん、なんか地下で起きとるちゃうか」

「そやなあ、オレの息子が噴火してくれたらいいやんけど」

「あほめかせ、お前のはもう死火山や!! 噴火することなんかあらへん」

「さみしいなあー、パターでも練習しとこ」

なんやかんや言いながらも、パターの練習では正気にもどって、もしかしたら、あわよくば今回はオレが・・・。名古屋の K さん O さんが、80 切るかどうかの話が出ているのに、もしかしたらもへったくれもない懲りない面々である。

スタートホールのティグラウンドに「しまる会」ゴルファーが集合。来年は古希、後期高齢者なのに、こうして楽しく語らいながら、ともにプレーを楽しめる余裕がある。

風景や花木の美しさに目をやるゆとりもある。豊富な人生経験に裏打ちされた落ち着きもある。と言うものもいれば、ドライバーをバットに見立てて、イチローの真似をして。

「こうやって風景を見ると、攻め方と球筋が頭に浮かんでくるんや」

「いつまでたっても、口だけは達者やなあー」

「なに抜かす。ちゃんとボールの行方みとってやー。最近よく見失うんや、たのむでー」

「見失うもんか、どうせ足元や! リキまはんや」

「ゴルフは本性が見えるちゃうけど、ほんまやなあ」

「ごちゃごちゃ言っとらんと、はよー打ちイヤー」

とめどもない会話をしながら各組はスタート。洋芝のラフと早いグリーンに悩まされる者、ボールがブッシュや林に入って探し回る者、狙わずとも白杭・黄色杭に吸い込まれる者、バンカーで砂浴びしてる者。



スタート前に記念撮影

「お前、鶏とちゃうか」

「出へんのやー」

「なんで、頭の中まで砂だらけなんよ、よっぽど砂浴びが好きなんや」

「あほー、コロしたるぞー」

さて、後半のハーフも終わりパーティ会場へ。

さあ、結果発表となり会場もざわついてきた。大阪のSさんがいいとか、九州のDさんもよかったみたいだ……。いや、やっぱり名古屋のOさんだかも……。

ここまではいつものパターン。結果は優勝、名古屋の近藤さん(T87)。ベスグロは同じく名古屋の大須賀さん(T86)との発表に、会場は「またか」と当然の結果にうなづいた。猛打賞は加藤さん、またゴルフ場からの特別賞(旅行スーツケース)は山守さん、いずれも名古屋で名古屋総ナメのゴルフでした。

「80台で回るとは相変わらず、すごいやんけ」

「この年になっても、スウィングがちゃうよ。それに、よう飛ばす」

「なんでも、エイジゴルファーを目指してるんやて」

「なんやそれ」

「80歳になったら、80以下で回る言うことや」

「そりゃ、バケモンちゃうか、わしゃ元気澆刺ゴルファーや」

「それでいいんや、定年後こそ世の中で一番幸せなゴルファーや」

楽しい会話と雄大な景色を満喫し、来年の再会を約束し、これから帰るグループ、さらにステラでもう一泊し軽井沢観光ののち帰る者、そして来年また「バカ話ができる」ことを楽しみに……。そして「笑える日」を楽しみに……。

遠くとも一度は詣れ善光寺

観光組はステラにて朝食後8時30分出発、一路善光寺へ。

山深い信濃の善光寺、参詣者は年間数百万人に及ぶとされています。交通の発達した現在では、それは容易な事です、徒歩でしか来ることの出来なかった時代にも、全国各地から険しい山坂を超えてたくさんの人たちの参詣が続いてきた。

しかし、ようやくたどり着いた善光寺で、本堂に入り手を合わせても、ご本尊の姿は見えません。目の前には、ただ金欄のお戸張があるばかりでした。

「善光寺の御本尊は誰が作ったの」

「印度からやってきた最初の仏様だそうな」

「どんな仏様なんだい」

「それは善光寺如来と呼ばれ、阿弥陀三尊像と呼ばれているんだよ」

「ようわからんけど、三人仏様がいるの」

「中央に阿弥陀如来、右に観音菩薩、左に勢至菩薩が台座の上に侍しているんだって」

「なんのご利益があるんだろうね」

「善光寺如来はすべての人々に、極楽往生を約束する仏様だって」

「じゃー、オレも極楽往生へ行けるっていうこと」

「いや、お前は地獄へ落ちて苦しむんじゃないかな」

「オイ、オイおどかすなよ。オレも来世は安楽な極楽にいきで一よ」



善光寺 山門（三門）

「まあ、あの世に行ってみないとわからんが、それを善光寺如来が安楽を間違いなく約してくれるというのだから、ありがたい極みだなあ」

善光寺に参拝して、この世の罪障消滅して極楽に行けるということで、昔から参道はいつも人波の絶えることがないと言われている所以である。

「じゃ、善光寺に参詣に来ない人は、善光寺如来に極楽に導いてもらえないの?」

「そうでもないよ。仁王門から山門に至る参道の両側に、無数の石造五輪塔が建っていたら」

「そういえば、いっぱいあったなあ」

「古いものでは、鎌倉時代のものもあるんだって」

「それは、なんの為にあるの」

「善光寺境内は善光寺如来の世界、この世の極楽浄土ととらえ、そこに生前参詣を果たせなかった人の遺骨の一部を埋葬し、五輪塔を建てて後世の安楽を願ったんだよ」

「今もそれは行われているの」

「いや今は、寺への納骨という形で行われているよ。だから、死んだら奥さんに、骨を善光寺へ納骨してくれと頼んどいたほうがいいよ」

「いまさら優しくしても遅いかなあ。頼みを聞いてもらえるよう、言うこと聞いとこ」

「ところで、牛にひかれて善光寺詣りという言葉をしってるだろ。どういう意味か知ってる?」

「いや、よくは知らんけど」

「昔、信濃の国に強欲で信心が薄く、善光寺に一度もお詣りに来たことのないお婆さんが住んでいたそう。ある日、川で布をさらしていたところ、どこからか一頭の牛が現れ、角に布を引っかけて走り出したそう。そこで慌てた婆さんは、布を取り戻そうと、その牛の後を一生懸命追いかけたんだよ。そして、気が付いてみるとそこは善光寺。

牛の姿はなく、角に引っ掛けられたはずの布は、如来の厨子の前にありました。実は、布をさらった牛は、善光寺如来の化身だったんだ。

そのことに気付いた婆さんは、自分の不信心を悔い、善光寺如来に手を合わせ、以来信心深くなって、善光寺にもたびたび訪れ、極楽往生をとげたそう」

「オレもこれまでの悪行の数々を悔い改め、今度はかみさんと一緒にお詣りにくるよ」

神妙な面持ちで参詣を済ませ、門前の蕎麦屋で信州そばと日本酒を楽しみ、それぞれ、奥さんへのお土産を買い、一路自宅へ帰るものと、ステラ延泊組とにわかれ、来年の再会を約し名残を惜しんだ。



善光寺仁王門にて

◆ 会員の趣味のコーナー

前回より第13回和光会総会の展示作品をご紹介しますが、今回も引き続き3名の方の作品をご紹介します。

今回もこれらを始めた時期(年数)・動機、作品を制作しての喜び(感動)、苦労したこと、「他に取り組んでいる趣味」などを含めて紹介いたします。

なお、出展出来なかった方の作品・趣味についても出来るだけ順次ご紹介をしていく予定です。

◆ 写真・竹細工

…… (2015-06) —和田 昭喜さんから投稿頂きました—

写真 (1点)

「フライ (竹細工)」 (四つ切ワイド)



竹細工の所属会員の展示作品を記録として撮影。利根町の所属写真クラブの展示会にて発表。食欲をそそる本物と見違える出来栄えが表現出来た。

竹細工 (5点)

「へら竿 8尺4本継 (総竹製・漆塗り)」



- A 穂先 真竹削り穂
- B 穂持 高野竹
- C 元上 矢竹
- D 元 矢竹 (握り乾漆仕上げ)



絵柄 (鳳凰) 拡大図

所属会員のへら竿作品 (本漆塗り) に惚れ、レパートリーを増やしたくて自ら作品作りに取りんだ。平成24年頃から活動。竹細工は子供の頃から肥後守でイタズラしていた。

利根町の文化祭及び生涯活動フェアで所属団体の会員として発表・展示、龍ヶ崎市市民活動センターの活動フェアにて発表・展示。今年は昨年に引き続き、オール竹のへら竿を製作。筑波湖

の釣り堀にて試釣り。ビックサイズをゲットした。感激！龍ヶ崎市市民活動センターで所属会員の作品を順次展示。昨年の展示作品「ジャンボゆらりトンボ」は常時展示中。退職した際に地域活動の町づくり同好者と集ううちに、竹細工の行燈・昆虫・花器等の製作者と出会い、小生も昔の民芸竹細工等に取り組むことにした。

◆ 木版画 (2点)

…… (2015-06) —鈴木 廣行さんから投稿頂きました—

①「雨の浅草寺」



浅草寺雷門真向かいの観光案内所5階からは本堂を中浅草寺全体が見事に見渡せる。スケールが大きく白黒版画で表現するのは私の力量では非常に難しいと感じた。当日は雨模様で仲見世が上から見ると色とりどりの雨傘でいっぱいだった。眺めているうちに何か力が湧いてきた。仲見世中心に本堂、宝蔵門、五重塔と欲張った作品になったが、大好きな浅草がどうにか表現出来て満足している。

②「川越一番街」



ジュディ・オングは有名な歌手、女優であるが、もうひとつの顔は木版画の世界で高い評価を受けている。随分前になるが展覧会で京都、川越の民家の作品を見て深い感動をおぼえた。2年ほど前に埼玉県に引っ越して来たのを機会に川越に何回か足を運んで作り上げた版画の一つがこの作品である。建物のスケールの大きさに負けないように気持ちを込めたつもりである。ジュディ・オングには足元にも及ばないがいろいろ感慨深いものがある。

◆ 日本画 (2点)

…… (2015-06) —布施 昌義さんから投稿頂きました—

①「冬の富士」(日本画F10号)



日本画をはじめて6年ほどになり15作品程度しか描いていませんが、富士山をいつか描きたいと思っていました。富士山は多くの画家が描いていますので、どうしても似たような絵になりやすく、真似になってしまう心配はありますが、とにかく一枚描くことにしました。現場でのスケッチは難しいので、友人が写真を撮ってくれたので、それを参考にしました。今後は夕景の富士、海から見た富士などを描きたいと考えています。

②「新緑の随心院・京都」(日本画F6号)



京都は竹林や、紅葉の寺院など風景画を何度か描きました。京都の春夏秋冬の風景が好きで何度か出かけましたが、最近は腰痛でなかなか出かけられません。以前に旅行した際に写真を撮っていたので、それを参考にしました。

随心院は山科にある閑静な寺院です。室内から庭園を見た風景にして、特に陰影をとりいれてメリハリに気をつけて描きました。新緑なので緑系の色が多くになりましたが、黄緑、薄い赤、黄色などを入れてみた方が良いのではと、仲間からいわれました。

◆ 油絵・書道

油絵(2点)

…… (2015-06) —笠井 宗男さんから投稿頂きました—

①「新緑の上越路」(F8号)



背景の妙義山の荒々しい姿に合わせた空と手前は静けさを意識してえがいた。2~3年前の作品

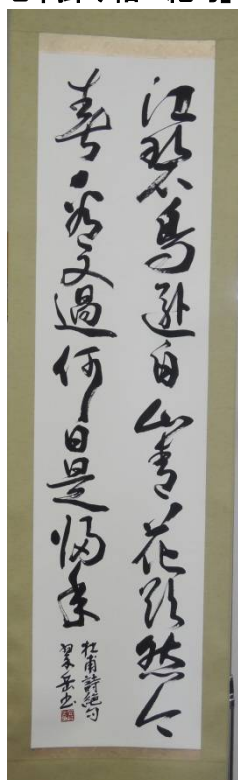
②「初夏の湿原」(F4号)



尾瀬には10数回行っている。スケッチもしているが写真をとってきている。それらをもとに想いを巡らせて何枚か描いている。今年描いたものです。6月7日にサインをいれました。

書道 条幅

毛筆掛け軸「絶句」 杜甫の詩



江碧鳥逾白 山青花欲然
今春看又過 何日是歸年

高校1年の漢文の教科書に載っていた五言絶句です。杜甫が西域の戦場の地より、故郷を忍んだ詩である。揚子江の紺壁の背景に真っ白い鳥が飛び映え、緑の山に赤い花が燃えるように咲く故郷をしのびながら、今年の春もみすみす過ぎてしまう。いつになったら故郷に帰れるだろうか。という詩で、前半の叙景と後半の叙情の濃縮された表現が大好きです。
今年5月にかきました。

◆ 訃報ご報告

E-MAIL 会員各位へは INFORMATION No.133でご連絡申し上げましたが、下記の方がご逝去されました。改めてここに哀悼の意を表し、謹んでご報告申し上げます。

林 昭男氏（2015年9月27日ご逝去）（享年86）

なお、故林 昭男氏は昭和36年8月に入社され、本社総務部で乗務職として社有車の運転を担当され、昭和63年退職されるまで歴代の役員の方々の運転手として活躍されました。

◆ 事務局より

- 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回は昨年夏の北海道の旅の様子をご投稿をいただきました。
山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。
<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>
「山本馬骨」で検索しても可能です。
- 「会員趣味のコーナー」では第13回和光会総会の展示作品の中から、常連となりました和田昭喜さんの写真・竹細工、笠井宗男さんの書・油絵、鈴木廣行さんの木版画、それに布施昌義さんの日本画の4名の方の作品をご紹介させて頂きました。
- 和光会の連絡・問い合わせ窓口について
第6期より会社（人事部）が和光会を全面的に支援して下さることになり、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただきしており、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：武田 修）で変わりありませんが、会報No.42でご連絡

しましたように2015年度より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になりました。

担当：木村 律子BD、佐々木 敏行、野原 菜穂

電話：03-3803-8865（代表）

FAX：03-3803-8875

E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp

住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りで変更ありません。

担当：大塚 勝則 SK

電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）

FAX：03-5810-5501

E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp

- ・ 2015年度会費納入対象の方は2003年（創立時）、2006年、2009年および2012年に入会された方々と、会報No.41でご連絡し、対象者宛に「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしましたが、会費「4,000円（2年分）」の振り込みが未だの方は次の口座宛振り込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。

なお、振込用紙を紛失された方はMTB和光会事務局あてご連絡くだされば再度送付いたします。

振込先：郵便局

口座番号：00100-7

口座記号：650896

加入者名：和光会

- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Kaigan/5992/>

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願いいたします。

2016-1-15 和光会事務局 寺門 三男

029-872-4122 mitsuotera@jcom.home.ne.jp